

高等教育の地域の担い手としての 公立短期大学の役割について(第1報)

——島根女子短期大学学生の大学進学動向——

安達 一明・井ノ口 淳三

(島根女子短期大学長) (教育学研究室)

On the Role of the Public Junior College
as the Regional Bearer of Higher Education (Part 1)

——The Behaviour of the Students of Shimane Womens' Junior
College in How They Chose Their College——

Kazuaki ADACHI and Junzo INOKUCHI

短期大学制度が創設されて本年で満30年を迎える。その当初は、在学年数そのものはさておき、制度そのものが「短期的」という不安定なもので、目的性格も明確でなく、その後「専修大学」案、「専科大学」案などが飛び出して足もとをおびやかされた。

これが制度として確固としたものになったのは昭和39年に至ってで、「4年制大学とは異って、職業又は實際生活に必要な能力を育成することを目的とする2年又は3年の高等教育機関」として位置づけられた。

そしてその頃から私立を主として雨後のたけのこの如く短期大学が誕生するに至ったが、ために必然的に多かろう安かろうの質的低下をもたらした。ところがそれに呼応するかの如く、数年前に短期大学設置基準のレベルダウンが実施されたのは、まことに遺憾といわざるをえない。

この中で、公立短期大学は地域の高等教育の普遍的な担い手として、教育の質をおとすことなく学生の獲得する資格の多様化に努めるなどして進んできた。

しかし公立短大のおかれた位置は容易ならざるものがある。

一つは財政の問題で、公立4年制大学が富裕自治体の設置によるのに反し、公立短大はその殆んどが貧困自治体の設置によっていることである。その二つは各種学校との相違点の確立であって、うっかりすると4年制大学と各種学校の挟みうちに会って自滅しかねない。

その三は、上記の2要因を反撃する意味からも、より地域に密着した公立短大としての回生である。これによって存在意義をしっかりと確保することができよう。その為には発想を転換して思い切った手をうつ必要がある。図体が大きくてとかく小廻りのきかない地方4年制大学に比して、公立短大こそが機動性を発揮して地域の高等教育の真の担い手にならねばいけない。

本稿はその一里塚ならぬ一町塚になればと願って行った調査の報告である。第1報で終らないよう、各位のご叱正をぜひ仰ぎたい。

調 査 要 綱

1. 調査方法 調査票配付によるアンケート調査とし、在學生は授業時に配布して数日中に回収、卒業生は同窓会名簿によって郵送した上で回答を返送してもらっ

た。この場合卒業生に対しては、学生時代に立帰り当時を想起して記入することを特に要請した。回答はいずれも無記名とした。

調査時期は、在学生は1979年11月29日～12月4日、卒業生は12月27日発送し、1980年1月18日着回答で締切った。

2. 調査対象 在学生は全員（在籍者262名）、卒業生は10年前の昭和44年卒業生（名簿記載者68名、以下卒後10年組と記す）及び20年前の昭和34年卒業生^{*1}（同67名、以下卒後20年組と記す）とした。

3. 調査事項 所属出身・受験の実態・進学・就職の動機・入学後の満足度と改善点・就職希望などに関して、16事項について質問し、各事項毎に設定してある項目よりの選択チェックあるいは自由記載によって回答を求めた。

その事項の概要は次の通りである。

- ① 所属学年
- ② 所属学科（専攻）
- ③ 出身県
- ④ 島根女子短大だけを受験したか
「はい」と答えた者はつぎ以下の⑤・⑥問に、「いい」と答えた者は⑦・⑧・⑨問に答える
- ⑤ 本学不合格の場合はどうするつもりだったか（設定した4項目中より任意に選択）
- ⑥ 最初から4年制大学を受験しなかった理由（5項目中より選択）
- ⑦ 本学以外に受験したすべての大学学校名（自由記載し合格した分は○印を付す）
- ⑧ 上記⑦の場合の志望学科名（13学科名ほかよりチェック）
- ⑨ 合格した場合の⑦の大学などへ進学しなかった理由（自由記載）
- ⑩ 本学を選んだ動機（15項目中より3つ選択）
- ⑪ 入学した学科（専攻）に対する満足度（5段階程度より選択）
- ⑫ その理由（たとえば友人・教師・勉強・クラブ・施設・就職など）
- ⑬ 本学の現状に対する要改善要充実点（10項目中より2つ選択）
- ⑭ 現状以外に本学に設置されるのが好ましい学科名（18学科名ほかより選択）
- ⑮ 志望する就職県名（第1～第3希望）
- ⑯ 大学での専攻と職業の種類との関連度に対する希

望（5段階程度より選択）

調査結果及び考察

調査に際しての回収率は、表1に示した通りである。卒業生のそれは50%に及ばず、従って実際の基礎となる回答数は各組25ほどであったが、これは十分とはいえぬまでも誤りなく各種の事項の検討に堪えうる数であると考えられる。

調査した全事項中、後日他の新たな資料と共に稿を改めるのが適当な一部の結果は本報告から割愛した。なお昭和34・44両年の全卒業生の出身県を調査すると、県内者でそれぞれ67%、63%となっており、表1であげた回

表1 調査者数と③出身県別

| 項目 | | 期別 | | |
|------|-----|----------|-----------|----------|
| | | I 卒後20年組 | II 卒後10年組 | III 在学生組 |
| 対象者数 | | 62 | 56 | 262 |
| 回答者数 | | 25 | 26 | 249 |
| 回収率% | | 40.3 | 47.3 | 95.5 |
| 出身県 | 島根 | 20 (80) | 14 (54) | 182 (73) |
| | その他 | 5 (20) | 12 (46) | 67 (27) |

注1. 卒業生の対象者数は調査方法のところで記した名簿記載者数から移転不明で戻ってきた分を引いた数である。
2. イタリックは100分比を示す。（以下の表も同一）

表2 ④受験の単併願別と⑦併願した他校の実況

| 項目 | | 期別 | | |
|-----------|-------|---------|---------|----------|
| | | I 25 | II 26 | III 249 |
| 本学だけの単願 | | 18 (72) | 6 (23) | 56 (22) |
| 他校との併願 | | 7 (28) | 20 (77) | 193 (78) |
| 併願校 | 4年制大学 | 4 (16) | 16 (62) | 34 (14) |
| | 短大ほか | 3 (12) | 4 (15) | 159 (64) |
| 併願4大の延数 | | 4[0] | 24[3] | 45[9] |
| 内訳 | 国立 | 4[0] | 18[2] | 10[0] |
| | 公立 | 0 | 4[0] | 11[2] |
| | 私立 | 0 | 2[1] | 24[7] |
| 併願短大の延数 | | 2[2] | 7[3] | 222[128] |
| 内訳 | 公立 | 0 | 6[2] | 56[6] |
| | 私立 | 2[2] | 1[1] | 166[122] |
| 併願その他校の延数 | | 2[2] | 4[4] | 39[22] |
| 合計 | | 8[4] | 35[10] | 306[159] |

注1. 併願校4年制大学のうちには、4大プラス他の短大の場合も含み、短大ほかのうちには各種専門学校も含む。
2. 延数欄の[]はうち合格した数を示す。
3. I～IIIのそばの数字は対象者数（以下の表も同一）

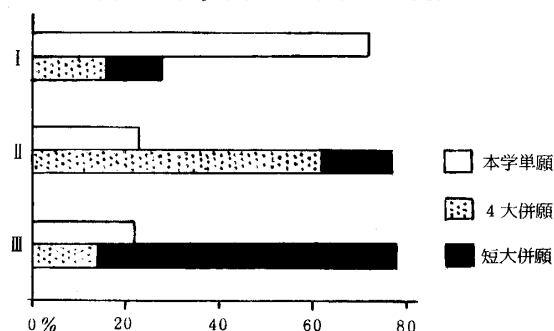
*1 島根女子短大の学科及び定員構成は、現在家政科食物専攻及び被服専攻各40名、保育科50名、昭和44年家政科は現状と同一（保育科は未設置）、昭和34年家政科生活（食物）専攻及び被服専攻各30名である。よって卒業生両年次の人数をそろえる為に昭和33年卒業生の両専攻各10名を34年組に追加して対象とした。

答者の場合とやや隔りがあるが方向としては同一である。

表2に本学だけを受験(単願と記す)したのか、いわゆるかけもち受験(併願と記す)をしたのか、その場合の実態はどうか、についての調査結果を示した。ここに本報で用いる単願・併願という言葉は、単に願書を提出したとの意ではなく実際に受験したことを意味していることを附記しておく。

表2で極めて明かなことは、単願はⅠでは70%にも及ぶが、Ⅱ・Ⅲではその半にも達しないこと、つぎにⅡとⅢの併願率は同じでも内容が異なり、併願の相手校が前者では4年制大学^{*1}(以下4大と記す)であるのに対し後者では短期大学(各種専門学校を含む、その割合は例えばⅢの延数で約15%)であることの2点である。(図1参照)

図1 本学単願・併願状況の変化



併願の相手校の詳細にまで触れる余裕はないが^{*2}かなりの程度併願校には合格しており、例えばⅢでみると4大・短大・各種専門学校への合格率は20%, 58%, 56%となっている。

つぎに表3で示した単願者に対する調査では、不合格の場合は浪人して翌年を期するという意思はなく、半数は就職する積りであり、それについてまだ受験の機会のある他の短大・学校を志す筈だったことが判明した。

また4大を受験しなかった理由として、興味ある結果が伺われるが他の事項と合わせて後述の論議の項でとりあげることにする。

つぎに単併願の相違はあっても、最終的には本学へ進学した人達の動機をまとめたのが表4である。Ⅰ～Ⅲを通じて最高は項目番号10「公立短大なので」、以下順に8「免許資格の獲得」・11「地理的に便利」・12「諸経費が安い」・3と4「周囲のすすめ」までが平均10%

^{*1} 共通一次試験の実施に伴い、本学の入試は国立二次試験と同日にしたので、Ⅲでは1年の在学学生は国立を併願した者は存在しない。

^{*2} 各種専門学校としては、その殆んどが国公立看護学校である。

表3 本学単願者の⑤不合格の場合の行動と⑥4大を受験しなかった理由

| 期別 | | Ⅰ 18 | Ⅱ 6 | Ⅲ 56 |
|--------------|----------|----------|-----|----------|
| 項目 | 浪人する | 0 (0) | 0 | 2 (4) |
| | 就職する | 9 (53) | 2 | 29 (52) |
| | 家事を手伝う | 2 (12) | 2 | 5 (9) |
| | その他 | 6 (35) | 2 | 20 (36) |
| | 計 | 17 (100) | 6 | 56 (100) |
| 4大を受験しなかった理由 | 学力的に困難 | 2 (11) | 1 | 21 (33) |
| | 学資面で困難 | 6 (33) | 1 | 12 (19) |
| | 女子は短大でよい | 8 (44) | 2 | 17 (27) |
| | 就職は短大が有利 | 1 (6) | 1 | 12 (19) |
| | その他 | 1 (6) | 1 | 1 (2) |
| | 計 | 18 (160) | 6 | 63 (100) |

注1. 一部に複数回答あり。

2. 不合格の場合のその他では「他の短大・専門学校を改めて受験する」がⅠ～Ⅲでそれぞれ2, 1, 18あった。

3. 合計数の少ないⅡでは100分比の算出をさけた(以下の表も同一)

表4 ⑩島根女子短大を選んだ動機(3項目選択)

| 期別 | | Ⅰ 25 | Ⅱ 26 | Ⅲ 249 |
|----|---------------|----------|-----------|------------|
| 項目 | 1. 学歴をうるため | 6 (9) * | 5 (7) | 28 (4) |
| | 2. 就職をよくするため | | | |
| | 3. 両親のすすめ | 6 (9) | 8 (11) | 74 (10) |
| | 4. 先生のすすめ | | | |
| | 5. 教養を高めるため | 9 (13) * | 6 (8) | 34 (5) * |
| | 6. 大学にただ入ればよい | | | |
| | 7. 学生生活を楽しむため | 2 (3) | 3 (4) | 28 (4) |
| | 8. 免許資格をうるため | 11 (16) | 8 (11) * | 133 (18) * |
| | 9. すべりどめとして | 1 (1) | 8 (11) * | 15 (2) |
| | 10. 公立短大なので | 14 (20) | 14 (20) | 169 (23) |
| | 11. 地理的に便利 | 10 (14) | 11 (15) * | 111 (15) * |
| | 12. 諸経費が安い | 9 (13) | 6 (8) * | 118 (16) * |
| | 13. 先輩がいるから | | | |
| | 14. 本学へのあこがれ | 2 (3) | 3 (4) | 13 (2) |
| | 15. 土地柄へのあこがれ | | | |
| 合計 | | 70 (100) | 72 (100) | 723 (100) |

注1. ゴシックで記載の項目は100分比の高いもの。

2. *印を付したのは同一項目で他の時期と異なる傾向を示すもの。

以上のベスト・ファイブであって、地域の高等教育の担い手としての公立短大の現状を浮き彫りにしている。これに対し表中*印を付した特に高いあるいは低い値を示

す項目は、時代のすう勢に伴った進学動向の変化の読みとれるものであるが、この点は後に述べることにする。

表5は学生生活をより有効に送るに必要とする本学の要改善、要充実の問題や場所について意見を求めた結果である。調査票に提示した具体的な項目は、欄外に記した通りであるが、先ず教育内容関係についてみると、クラスによって改善希望の比率の高い場合のあるのが観察された。この点はわれわれ大学側として十分に戒心して検討すべき問題であると考ええる。ついで施設の項目に及ぶと、とても要求された2項目以内では挙げ切れないと要望が殺到した感あり、とくに要望の集中したのは体育館であり、ついで図書館、学生控室、サークル施設等々である。設置されて30年に及ぼうとする本学が、いまだによそのお古の施設やキャンパスで辛抱させられている現状は、学生に合わせる顔もなく遺憾の極みでまことにお恥かしい次第である。

表5 ⑬島根女子短大で改善充実すべき点
(2項目以内選択)

| 期 別 項 目 | I 25 | II 26 | III 249 |
|------------|---------|---------|----------|
| 教育内容関係3項目 | 18(42) | 18(35) | 88(16) |
| 施設関係6項目 | 24(56) | 33(63) | 430(80) |
| そ の 他 | 1(2) | 1(2) | 17(3) |
| 合 計 | 43(100) | 52(100) | 535(100) |

注1. 教育内容3項目とは時間割編成・授業内容・学科目の種類の3つ。

2. 施設6項目とは実験実習施設・図書館・体育館・グラウンド・クラブサークル施設・学生控室の6つ。

3. その他ではトイレ・食堂などの施設関係をあげ全施設と記したものもあり。

論 議

戦後新教育制度が発足し、6・3・3制の上におかれた高等教育は著しい変革をとげて来たが、その最たるものは進学率の上昇、女子に対する高等教育の門戸の開放である。この変化の中で公立短大を志願し入学した女性の進学意識は、如何なる移り行きを示したかを、本調査は明確にしたと思われる。

著者らは、本調査の結果から社会情勢の変化に伴う高等教育の変遷の一端を、公立短大に進学した女性の意識の動向から考察した場合、つぎの3つの時期に分れると考える。

- (1) 短大専願期：歴史の古い女子大学や男女共学大学の教育学部を除いては、女性が4大にどしどし進学するにはまだためらいがあって質量共に低調であった。しかし女性も高等教育をとの機運は高まりつつあって、折から制度化され出発した短期大学が、こ

の要望にこたえる存在となった。本調査のIがこれに相当する。

この時期は女子公立短大は単願率が高く、表3の4大を希望しなかった理由で示されたように「女子は短大でよい」が圧倒的に多く、「学力的には自信があり」で、また表4及び図2で示すように「教養を高めるため」「学歴をうるため」という進学動機をもつ特徴がある。

- (2) 4大併願期：本調査ではIIに相当し、高度成長の社会情勢と相俟って共学の4大に女性の進学が著しくなった時代で、公立短大は4大の補完的存在となり4大との併願率が高い。表4及び図2に示すように「すべりどめ」という動機が多く見受けられ、「免許資格を得たい」という意識は比較的低く、「諸経費が安い」ことも重要視されていない。

- (3) 短大併願期：本調査のIIIつまり現在である。女性の4大進学者の就職難と一転した低成長時代の社会情勢、更に受験競争の過熱化がこの時代の背景である。従って表3のように「女性は短大でよい」の風潮が生じて短大併願率が高くなり「学力的に余り自信がなく」、表4及び図2のように「免許資格をうる」と公立短大として「諸経費が安いこと」が魅力となっている。

これらの時期の学生の進学意識を、一口にまとめていうならば、(1)教養志向まじめ型 (2)すべりどめケセラセラ型 (3)免許獲得がっちり型 とでも表現できようか。

従って表6に現われたように、まじめに期待して入学したIでは満足度が低く、ケセラセラのIIが満足度高く、IIIがその中間となっている。また表5の要改善事項でも、教育内容項目に対する要望がIでは圧倒的に高いのもこの現われである。表7は大学で学んだ専門と職種との関連に対する希望を尋ねたものであるが、表6と全く同様な傾向を示しているのは当然であろう。

表6 ⑪入学した学科(専攻)に対する満足度

| 期 別 項 目 | I 25 | II 26 | III 249 |
|------------|--------|--------|---------|
| 1. 満足している | 5(20) | 8(31) | 55(22) |
| 2. まあまあ満足 | 10(40) | 11(42) | 117(47) |
| 3. 概して不満 | 7(28) | 5(19) | 37(15) |
| 4. 失望 | 1(4) | 0(0) | 10(4) |
| 5. よく分らない | 2(8) | 2(8) | 30(12) |
| 満 足 度 | 2.2 | 5.5 | 4.0 |

注 満足度欄の数値は $(1 \times 2 + 2) \div (3 + 4 \times 2)$ で、 $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4$ はそれぞれの項の100分比数値を表わす。

表7 ⑬大学で学んだ専門に関係のある職業につきたいか

| 期 別 | I 25 | II 26 | III 249 |
|------------|---------|---------|---------|
| 1. 強く希望する | 14 (56) | 4 (15) | 76 (31) |
| 2. そうありたい | 6 (24) | 14 (54) | 79 (32) |
| 3. 特にこだわらぬ | 3 (12) | 6 (23) | 63 (25) |
| 4. 職種よりも地域 | 1 (4) | 0 (0) | 24 (10) |
| 5. よく分らない | 1 (4) | 2 (8) | 7 (3) |

尾形氏¹⁾は短大はこの20年間で花嫁学校から資格学校への変容が進んだとしている。大きな流れとしては本調査も同断であると考えてよいが、その中間に高度成長の生んだおとし子ともいえるⅡの時期があったと判断したい。

なお又同氏は「短大離れ」の時代が始まっていると指摘しているが、田中氏ら²⁾の挙げたアメリカの私立短大の経営困難の現状が、早晩わが国でも激甚化することの現われかも知れない。といえわが国の公立短大でも一部の学科では定員割れが起っている所さえあるというし、先の表2の考察で述べたように、4大短大以外の専門学校などとの併願における併願校の合格率が、短大の場合とほぼ同程度なのは、併願校に合格した場合の逃げ率がかなりあるからと解釈すべきなのだろうか。

ただし資格・免許を与えることにのみ汲々として、大学らしさを失うような愚かな道を短大がとってはならない。

図2で示した本学選択の動機は、そのまま公立短大が社会から期待されている要素を示すものである。このビッグ・ファイブの中「公立であるということ」「地理的に便利」「経済的に助かる」「周囲のすすめにより」という4つまでが、地域に根ざしたものであることは、公立短大の存在が、家ぐるみ社会ぐるみ地域ぐるみの中にあ

ることを示している。

今日アメリカでコミュニティ・カレッジといえば公立短大を意味するごとく、わが国の短大も著者にいわせれば変革してⅣ期を迎えなければならない。伊藤氏³⁾も指摘しているように、成人教育、生涯教育、カリキュラムの多様化、夜間部の設置などに力を入れ、地域社会の文化の向上と地域住民の幸福に意を用いなければならない。それには先ず現状——公立短大自身の——向上から始めて行かなければならない。

本調査の示すところは、今日及び今後引続くであろう低成長時代では、女子の高等教育は地域内の公立機関で受けさせぬ限り相当に困難性を増しつつあることを物語っている。公立短大の地域で果す役割りに、最少限度その程度の認識でもせめて社会が抱いてくれて、公立短大の充実に意を用いてくれぬ限り、コミュニティ・カレッジの夢はまだ遥かなりと嘆かざるを得ない。

摘 要

- 1979年11月～1980年1月の間に、島根女子短大の全在学学生並びに10年前及び20年前の卒業生全員に、進学動向に関するアンケート調査を行った。
- 調査は、受験の実態・進学の動機・入学後の満足度と要改善点・就職希望などに関して16事項にわたった。
- 調査の結果、Ⅰ卒業後20年、Ⅱ卒業後10年、Ⅲ在学学生の比較では、Ⅰでは本学のみ受験、Ⅱでは4年制大学との併願、Ⅲでは他の短大との併願が、それぞれ多数(62～72%)を占めた。
- 最終的に本学を選んだ理由の主なもの、公立短大だから、免許資格をうるため、地理的に便利、諸経費が安くてすむ、周囲のすすめによる、などであった。
- 本学で改善すべき点では、Ⅰでは教育内容関係、Ⅲでは施設関係の要望が多数を占めた。

引 用 文 献

- 尾形憲：私立短期大学白書，法政大学経済学部尾形ゼミナール 資料第5集 183 (1977)
- 田中久子・森本武也：アメリカの短期大学 研成社 143 (1978)
- 伊藤和衛：公立短期大学の将来ビジョン 山梨県立女子短期大学 特別報告 17 (1978)

(昭和55年1月22日受理)

図2 本学を選んだ動機の100 分比

